

感染症発生動向調査事業における宮崎県の患者発生状況 — 2021 年 (令和 3 年) —

古澤優 三浦美穂¹⁾ 吉野修司¹⁾ 杉本貴之²⁾ 藤崎淳一郎

Summary of the 2021 Annual Report According to the National Epidemiological Surveillance of Infectious Diseases in Miyazaki Prefecture

Furusawa Yu, Miura Miho,
Yoshino Shuji, Sugimoto Takayuki, Fujisaki Junichiro

要旨

2021 年に県内では全数把握対象 91 疾患中、22 疾患が報告された。疾患別では新型コロナウイルス感染症 (5,264 例)、結核 (130 例)、梅毒 (89 例)、つつが虫病 (72 例) の報告が多かった。梅毒は 2020 年に過去最も多い報告数 (40 例) となったが、それを大幅に上回る報告数となった。また、新型コロナウイルス感染症は、指定感染症から新型インフルエンザ等感染症へ分類され、昨年 (876 例) を大きく上回る報告数となった。

定点把握対象疾患のうちインフルエンザ及び小児科対象疾患については、報告総数が前年の約 1.3 倍、例年の約 0.6 倍、全国の約 2.1 倍であった。眼科定点対象疾患の報告総数は、前年の約 1.3 倍、例年の約 0.3 倍、全国の約 3.3 倍であった。基幹定点対象疾患の報告総数は、前年の約 0.1 倍、例年の約 0.01 倍、全国の約 0.1 倍であった。月報告対象疾患の性感染症の報告総数は、前年の約 1.1 倍、例年の約 1.2 倍、全国の約 0.7 倍であった。薬剤耐性菌感染症の報告総数は、前年の約 1.1 倍、例年と同程度、全国の約 0.9 倍であった。

キーワード：感染症発生動向調査事業、宮崎県、全数把握、定点把握

はじめに

当研究所では、1994 年 (平成 6 年) から感染症発生動向調査事業に基づいて感染症情報の収集と解析を行ってきた。解析した情報は週報や月報として医療機関や県民に情報提供し、感染症の発生及び拡大の防止並びに公衆衛生の向上に努めている。

今回、本県における 2021 年 (令和 3 年) の患者発生状況をまとめたので報告する。

調査方法

1 対象疾患及び定点医療機関

「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」で定められた 116 疾患を調査対象

企画管理課 ¹⁾ 微生物部 ²⁾ 中央保健所

とした。

指定届出医療機関 (以下「定点」という。) は、感染症発生動向調査事業実施要綱¹⁾に基づき選定した (表 1)。

表 1 保健所別指定届出医療機関 (定点数)

保健所名	定点種別				
	インフルエンザ	小児科	眼科	基幹	STD
宮崎市	16	10	3	1	4
都城	10	6	2	1	2
延岡	7	4	1	1	2
日南	5	3		1	1
小林	5	3		1	1
高鍋	6	4		1	2
高千穂	2	1			
日向	6	4		1	1
中央	2	1			
計	59	36	6	7	13

2 調査期間

全数把握対象疾患、定点把握対象疾患については 2021 年 1 週から 52 週まで、インフルエンザについては 2021/2022 年シーズンの 2021 年 41 週から 2022 年 14 週までをそれぞれ調査期間とし、診断日をもとに集計した。なお、新型コロナウイルス感染症については陽性判明日をもとに集計した。

結果

1 全数把握対象疾患の発生状況

1) 一類感染症

報告はなかった。

2) 二類感染症

結核 130 例が報告された。

a) 結核 Tuberculosis

報告数は 130 例で、前年 (152 例) の約 0.9 倍であった。病型は、肺結核が 51 例、その他の結核 (結核性胸膜炎、結核性リンパ節炎、粟粒結核、結核性心膜炎、頸部リンパ節結核等) が 30 例、肺結核及びその他の結核 (結核性胸膜炎、粟粒結核、結核性リンパ節炎、骨結核、皮膚結核) が 8 例、疑似症患者が 3 例、無症状病原体保有者が 38 例であった。宮崎市 (73 例)、延岡 (18 例)、都城 (11 例) 保健所からの報告が多く、性別では男性が 69 例、女性が 61 例であった。年齢別では 70 歳以上が全体の約 6 割を占めた。

3) 三類感染症

腸管出血性大腸菌感染症 29 例が報告された。

a) 腸管出血性大腸菌感染症

Enterohemorrhagic *Escherichia coli* infection

報告数は 29 例で、前年 (23 例) の約 1.3 倍であった。患者が 21 例、無症状病原体保有者が 8 例であった。O 血清型別では、O26 が 17 例、O111 が 5 例、O8、O91、O157 が各 1 例、不明が 4 例であった (表 2)。都城 (11 例)、日南 (8 例)、宮崎市 (6 例)、高鍋 (3 例)、小林 (1 例) 保健所からの報告であった。年齢別では 0~4 歳が全体の約 4 割と多く、発生月別では、1 月が全体の約 3

割を占めた。

表 2 O 血清型別報告数

O 血清型	報告数
O26	17
O111	5
O8	1
O91	1
O157	1
不明	4
計	29

4) 四類感染症

E 型肝炎 5 例、重症熱性血小板減少症候群 (SFTS) 13 例、つつが虫病 72 例、日本紅斑熱 19 例及びレジオネラ症 13 例が報告された。

a) E 型肝炎 Hepatitis E

報告数は 5 例で、宮崎市 (4 例)、延岡 (1 例) 保健所からの報告であった。年齢は 60 歳代が 2 例、40 歳代、70 歳代及び 80 歳代が各 1 例であった。主な症状として、発熱、全身倦怠感、食欲不振、黄疸、肝機能異常等がみられた。

b) 重症熱性血小板減少症候群

SFTS (Severe Fever with

Thrombocytopenia Syndrome)

報告数は 13 例で、宮崎市 (7 例)、延岡 (3 例)、高鍋 (2 例)、都城 (1 例) 保健所からの報告であった。性別は男性が 5 例、女性が 8 例で、年齢は 70 歳代が 10 例、80 歳代が 2 例、60 歳代が 1 例であった。主な症状として発熱、頭痛、筋肉痛、神経症状、下痢、嘔吐、食欲不振、全身倦怠感、白血球・血小板減少、リンパ節腫脹等がみられた。患者の発症時期は、2~9 月で特に 5 月に多かった。

c) つつが虫病

Scrub typhus (Tsutsugamushi disease)

報告数は 72 例で前年 (57 例) の約 1.3 倍と増加した。小林 (24 例)、都城 (18 例)、日南 (14 例) 保健所からの報告が多く、性別は男性が 45 例、女性が 27 例、年齢別では 60 歳以上が約 8 割を占めた。主な症状として頭痛、発熱、刺し口、リンパ節腫脹、発疹等がみられた。患者の発症時期は例年どおり冬季で、1 月 (10 例)、2 月、4 月、5 月 (各 1 例)、10 月 (2 例)、11 月 (26 例)、12 月 (31 例) の報告であった。

d) 日本紅斑熱 Japanese spotted fever

報告数は 19 例で、宮崎市 (10 例)、日南 (6 例)、高鍋 (2 例)、日向 (1 例) 保健所からの報告であった。性別は男性が 9 例、女性が 10 例、年齢は 70 歳代が 10 例と多く、次いで 80 歳代が 4 例、60 歳代が 3 例、90 歳代が 2 例であった。主な症状として発熱、頭痛、刺し口、発疹、DIC、肝機能異常等がみられた。患者の発症時期は 3 月から 10 月であった。

e) レジオネラ症 Legionellosis

報告数は 13 例で、病型は肺炎型が 12 例、ポンティアック熱型が 1 例あった。宮崎市 (7 例)、小林 (4 例)、高鍋、延岡 (各 1 例) 保健所からの報告であった。性別は男性が 11 例、女性が 2 例で、年齢は 60 歳代と 70 歳代が各 4 例、50 歳代が 2 例、30 歳代、90 歳代、100 歳代が各 1 例であった。主な症状として発熱、咳嗽、呼吸困難、下痢、肺炎、多臓器不全等がみられた。

5) 五類感染症

アメーバ赤痢 3 例、ウイルス性肝炎 4 例、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症 5 例、クリプトスポリジウム症 2 例、クロイツフェルト・ヤコブ病 1 例、劇症型溶血性レンサ球菌感染症 5 例、後天性免疫不全症候群 5 例、侵襲性インフルエンザ菌感染症 4 例、侵襲性肺炎球菌感染症 7 例、水痘 (入院例) 4 例、梅毒 89 例、播種性クリプトコックス症 4 例、破傷風 7 例及び百日咳 2 例が報告された。

a) アメーバ赤痢 Amebic dysentery

報告数は 3 例で、病型はいずれも腸管アメーバ症で、都城 (2 例)、宮崎市 (1 例) 保健所からの報告であった。性別はいずれも男性で、年齢は 50 歳代が 2 例、40 歳代が 1 例であった。主な症状として下痢、粘血便、しぶり腹、腹痛、大腸粘膜異常所見等がみられた。

b) ウイルス性肝炎 Viral hepatitis

報告数は 4 例で、原因病原体は B 型肝炎ウイルスが 3 例、EB ウイルスが 1 例であった。宮崎市保健所からの報告で、性別は男性、女性各 2 例であった。年齢は 40 歳代が 2 例、20 歳代と 30 歳代が各 1 例であった。主な症状として全身倦怠感、

嘔吐、褐色尿、発熱、肝機能異常、黄疸、劇症肝炎等がみられた。

c) カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症

Carbapenem-resistant *Enterobacteriaceae* infection

報告数は 5 例であった。原因病原体は *Enterobacter cloacae*、*Enterobacter aerogenes*、*Citrobacter koseri*、*Serratia marcescens*、*Escherichia coli* が各 1 例で、宮崎市 (3 例)、都城、延岡 (各 1 例) 保健所からの報告であった。年齢は 80 歳代が 3 例、40 歳代と 70 歳代が各 1 例で、主な症状として尿路感染症、菌血症、肺炎、腹膜炎がみられた。

d) クリプトスポリジウム症 Cryptosporidiosis

報告数は 2 例で、宮崎市、高鍋保健所からの報告であった。性別はいずれも男性で、年齢は 20 歳代と 30 歳代であった。主な症状として腹痛、下痢、発熱がみられ、いずれも動物からの感染が疑われた。

e) クロイツフェルト・ヤコブ病

Creutzfeldt-Jakob disease

報告数は 1 例で、病型は古典型クロイツフェルト・ヤコブ病であった。宮崎市保健所からの報告で、性別は男性、年齢は 60 歳代であった。主な症状として進行性認知症、ミオクロヌス、錐体路症状、小脳症状、視覚異常、無動性無言状態、記憶障害、精神・知能障害がみられた。

f) 劇症型溶血性レンサ球菌感染症

Severe invasive streptococcal infection

報告数は 5 例で、血清群は B 群が 3 例、G 群が 2 例で、宮崎市保健所からの報告であった。年齢は 70 歳代と 80 歳代が各 2 例、90 歳代が 1 例であった。主な症状としてショック、腎不全、DIC、軟部組織炎、中枢神経症状がみられた。

g) 後天性免疫不全症候群

Acquired immunodeficiency syndrome

報告数は 5 例であった。病型は AIDS が 1 例 (指標疾患: ニューモシスティス肺炎、サイトメガロウイルス感染症)、無症候性キャリアが 2 例、その他 (HIV 感染症等) が 2 例であった。宮崎市保健所からの報告で、性別は男性が 4 例、女性が 1 例で、年齢は 20 歳代が 2 例、30 歳代、40 歳代、

60 歳代が各 1 例であった。感染経路は異性間性的接触 2 例, 同性間性的接触 2 例, 不明 2 例であった。

h) 侵襲性インフルエンザ菌感染症

Invasive *Haemophilus influenzae* disease

報告数は 4 例で, 宮崎市保健所からの報告であった。年齢は 40 歳代, 50 歳代, 60 歳代, 80 歳代で, 主な症状として頭痛, 発熱, 肺炎がみられた。

i) 侵襲性肺炎球菌感染症

Invasive pneumococcal disease

報告数は 7 例で, 宮崎市 (3 例), 都城, 延岡 (各 2 例) 保健所からの報告であった。性別は男性が 4 例, 女性が 3 例で, 年齢は 60 歳代が 3 例, 0~4 歳, 50 歳代, 70 歳, 90 歳代が各 1 例であった。主な症状として発熱, 咳, 全身倦怠感, 意識障害, 肺炎, 菌血症等がみられた。ワクチン接種歴は接種有り, 無しが各 2 例, 不明が 3 例であった。

j) 水痘 (入院例) Chickenpox

報告数は 4 例で, 病型は検査診断例が 1 例, 臨床診断例が 3 例で, 宮崎市 (3 例), 都城 (1 例) 保健所からの報告であった。年齢は 5~9 歳が 2 例, 20 歳代と 70 歳代が各 1 例であった。主な症状として発熱, 発疹, 免疫不全がみられ, 1 例が他疾患入院中の発症であった。ワクチン接種歴は接種有り, 無しが各 1 例で, 不明が 2 例であった。

k) 梅毒 Syphilis

報告数は 89 例で, 前年 (40 例) を約 2.2 倍と大きく上回り過去最多となった。病型は先天梅毒が 1 例, 早期顕症 I 期が 25 例, 早期顕症 II 期が 40 例, 無症状病原体保有者が 23 例であった。宮崎市 (67 例), 都城, 延岡 (各 8 例), 日向 (5 例), 小林 (1 例) 保健所からの報告であった。性別は男性が 51 例, 女性が 38 例で, 年齢は 20 歳代が 27 例, 40 歳代が 22 例, 30 歳代が 17 例, 50 歳代が 10 例, 10 歳代が 7 例, 60 歳代が 3 例, 0~4 歳, 70 歳代, 80 歳代が各 1 例であった。感染経路は異性間性的接触が 59 例, 同性間性的接触が 4 例, 性的接触 (異性間・同性間不明) が 14 例, 母子感染が 1 例, 不明が 11 例であった。主な症状として初期硬結, 硬性下疳, 鼠径部リンパ節腫脹, 梅毒性バラ疹, 丘疹性梅毒疹, 眼症状等

がみられた。

1) 播種性クリプトコックス症

Disseminated cryptococcosis

報告数は 4 例で, 宮崎市保健所からの報告であった。年齢は 60 歳代が 2 例, 70 歳代と 90 歳代が各 1 例で, 主な症状として頭痛, 発熱, 意識障害, 項部硬直, 呼吸器症状, 胸部異常陰影, 皮疹, 紅斑, 中枢神経系病変, 真菌血症がみられた。

m) 破傷風 Tetanus

報告数は 7 例で, 宮崎市 (4 例), 都城 (3 例) 保健所からの報告であった。年齢は 70 歳代が 3 例, 80 歳代が 2 例, 60 歳代と 90 歳代が各 1 例であった。主な症状として筋肉のこわばり, 開口障害, 嚥下障害, 発語障害, 強直性痙攣, 痙笑, 反弓緊張がみられた。

n) 百日咳 Pertussis

報告数は 2 例と昨年 (37 例) を大きく下回った。宮崎市, 延岡保健所からの報告で, 性別は男女各 1 例ずつであった。年齢は 40 歳代と 70 歳代で, ワクチンの接種歴はいずれも不明であった。主な症状として持続する咳, 夜間の咳き込み, 白血球数増多, 肺炎がみられた。

6) 新型インフルエンザ等感染症

新型コロナウイルス感染症 5,264 例が報告された。

a) 新型コロナウイルス感染症

Corona-Virus Disease-2019

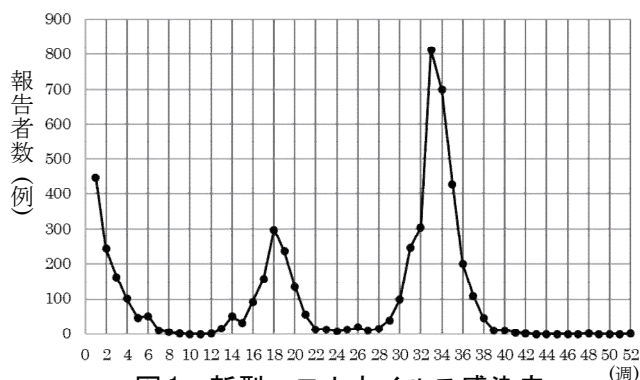


図1 新型コロナウイルス感染症
週ごとの感染者数推移

報告数は 5,264 例で, 陽性者の居住地保健所別では, 宮崎市 (2,929 例), 都城 (592 例), 日向 (439 例), 高鍋 (426 例) 保健所からの報告が多

かった。年齢別では 20 歳代が全体の約 22%を占め、次いで 30 歳代と 40 歳代が約 16%ずつであった。また、週ごとの感染者数は図 1 のとおりであった。

2 定点把握対象疾患の発生状況

1) インフルエンザ及び小児科対象疾患

報告総数は 25,134 人、定点当たりの報告数は 698.0、前年の約 1.3 倍、過去 5 年間の平均値(以下、「例年」という。)の約 0.6 倍、全国の約 2.1 倍であった。

各疾患の発生状況の概要は表 3、経時的発生状況は図 2 のとおりで、その概略を次に示す。

a) インフルエンザ Influenza

2021/2022 年シーズンの報告総数は 14 人、定点当たりの報告数は 0.24 で、全国の約 1.6 倍で、前年に引き続き低い値となった。年齢別では 0~4 歳が全体の 29%を占めた。

b) RS ウイルス感染症

Respiratory syncytial virus infection

報告総数は 4,218 人、定点当たりの報告数は 117.2 で、前年の約 14.6 倍、例年の約 2.0 倍、全国の約 1.6 倍であった。中央(191.0)、日南(152.0)、延岡(128.3)保健所からの報告が多く、年齢別では 6 ヶ月~3 歳が全体の 84%を占めた。

c) 咽頭結膜熱 Pharyngoconjunctival fever

報告総数は 798 人、定点当たりの報告数は 22.2 で、前年の約 0.8 倍、例年の約 0.6 倍、全国の約 2.1 倍であった。都城(31.5)、宮崎市(28.5)、高鍋(22.8)保健所からの報告が多く、年齢別では 6 ヶ月から 3 歳が全体の 84%を占めた。

d) A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎

Group A streptococcal pharyngitis

報告総数は 2,654 人、定点当たりの報告数は 73.7 で、前年及び例年の約 0.6 倍、全国の約 2.5 倍であった。日南(429.7)、延岡(161.0)、中央(49.0)保健所からの報告が多く、年齢別では 1 歳から 4 歳が全体の 48%を占めた。

e) 感染性胃腸炎 Infectious gastroenteritis

報告総数は 10,839 人、定点当たりの報告数は 301.1 で、前年の約 1.2 倍、例年の約 0.7 倍、全国の約 1.9 倍であった。小林(504.7)、都城(473.3)、

中央(422.0)保健所からの報告が多く、年齢別では 1 歳から 3 歳が全体の 46%を占めた。

f) 水痘 Chickenpox

報告総数は 279 人、定点当たりの報告数は 7.8 で、前年の約 0.6 倍、例年の約 0.4 倍、全国の約 1.4 倍であった。日南(13.0)、中央(12.0)、都城(9.0)保健所からの報告が多く、年齢別では 5 歳から 6 歳が全体の 28%を占めた。

g) 手足口病 Hand, foot and mouth disease

報告総数は 3,720 人、定点当たりの報告数は 103.3 で、前年の約 5.1 倍、例年と同率、全国の約 4.2 倍であった。宮崎市(131.3)、中央(116.0)、日南(104.0)保健所からの報告が多く、年齢別では 6 ヶ月から 2 歳が全体の 82%を占めた。

h) 伝染性紅斑 Erythema infectiosum

報告総数は 36 人、定点当たりの報告数は 1.0 で、前年の約 0.1 倍、例年の約 0.04 倍、全国の約 1.4 倍であった。中央(3.0)、宮崎市(1.9)、都城(1.2)保健所からの報告が多く、年齢別では 6 ヶ月から 4 歳が全体の 78%を占めた。

i) 突発性発しん Exanthem subitum

報告総数は 1,236 人、定点当たりの報告数は 34.3 で、前年の約 0.9 倍、例年の約 0.8 倍、全国の約 1.8 倍であった。宮崎市(43.2)、延岡(42.3)、都城(39.5)保健所からの報告が多く、年齢別では 6 ヶ月から 1 歳が全体の 93%を占めた。

j) ヘルパンギーナ Herpangina

報告総数は 1,229 人、定点当たりの報告数は 34.1 で、前年の約 1.5 倍、例年の約 0.8 倍、全国の約 2.9 倍であった。延岡(115.3)、日向(42.3)、中央(41.0)保健所からの報告が多く、年齢別では 6 ヶ月から 2 歳が全体の 80%を占めた。

k) 流行性耳下腺炎 Mumps

報告総数は 111 人、定点当たりの報告数は 3.1 で、前年の約 0.8 倍、例年の約 0.1 倍、全国の約 1.3 倍であった。中央(12.0)、延岡(9.3)、都城(4.0)保健所からの報告が多く、年齢別では 4 歳から 8 歳が全体の 68%を占めた。

2) 眼科及び基幹定点対象疾患

眼科定点対象疾患の報告総数は 198 人、定点当たりの報告数は 33.0 で、前年の約 1.3 倍、例年の

約 0.3 倍, 全国の約 3.3 倍であった。

基幹定点対象疾患の報告総数は 2 人, 定点当たりの報告数は 0.29 で, 前年の約 0.1 倍, 例年の約 0.01 倍, 全国の約 0.1 倍であった。

a) 急性出血性結膜炎

Acute hemorrhagic conjunctivitis

報告はなかった。

b) 流行性角結膜炎

Epidemic keratoconjunctivitis

報告総数は 198 人, 定点当たりの報告数は 33.0 で, 前年の約 1.3 倍, 例年の約 0.3 倍, 全国の約 3.4 倍であった。年齢別では 20 歳代から 50 歳代が全体の 71% を占めた。

c) 細菌性髄膜炎 **Bacterial meningitis**

報告はなかった。

d) 無菌性髄膜炎 **Aseptic meningitis**

報告総数は 2 人, 定点当たりの報告数は 0.29 で, 前年の 2.0 倍, 例年及び全国の約 0.3 倍であった。年齢は 5~9 歳と 10 歳代で, 原因菌は不明であった。

e) マイコプラズマ肺炎

Mycoplasmal pneumonia

報告はなかった。

f) クラミジア肺炎 **Chlamydial pneumonia**

報告はなかった。

g) 感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)

Infectious gastroenteritis (only by Rotavirus)

報告はなかった。

3) 月報告対象疾患

性感染症の報告総数は 497 人, 定点当たりの報告数は 38.2 で, 前年の約 1.1 倍, 例年の約 1.2 倍, 全国の約 0.7 倍であった。

薬剤耐性菌感染症の報告総数は 206 人, 定点当たりの報告数は 29.4 で, 前年の約 1.1 倍, 例年と同程度, 全国の約 0.9 倍であった。

a) 性器クラミジア感染症

Genital chlamydial infection

報告総数は 254 人, 定点当たりの報告数は 19.5 で, 前年及び例年と同程度, 全国の約 0.6 倍であった。延岡 (29.5), 都城 (27.5), 宮崎市 (19.5)

保健所からの報告が多かった。性別は男性が約 3 割, 女性が約 7 割で, 年齢別では 20 歳代が全体の 57% を占めた。

b) 性器ヘルペスウイルス感染症

Genital herpes simplex virus infection

報告総数は 124 人, 定点当たりの報告数は 9.5 で, 前年の約 1.2 倍, 例年の約 2.0 倍, 全国と同程度であった。日南 (51.0), 日向 (14.0), 宮崎市 (10.3) 保健所からの報告が多かった。性別は男性が約 2 割, 女性が約 8 割で, 年齢別では 20 歳代から 40 歳代が全体の 55% を占めた。

c) 尖圭コンジローマ **Condyloma acuminatum**

報告総数は 25 人, 定点当たりの報告数は 1.9 で, 前年及び例年の約 1.1 倍, 全国の約 0.3 倍であった。日南 (7.0), 宮崎市 (3.8), 高鍋 (1.5) 保健所からの報告であった。性別は男性が約 1 割, 女性が約 9 割で, 年齢別では 20 歳代が全体の 68% を占めた。

d) 淋菌感染症 **Gonorrhea**

報告総数は 94 人, 定点当たりの報告数は 7.2 で, 前年の約 1.3 倍, 例年の約 1.4 倍, 全国の約 0.7 倍であった。都城 (18.0), 延岡 (11.0), 高鍋 (9.0) 保健所からの報告が多かった。性別は男性が約 7 割, 女性が約 3 割で, 年齢別では 20 歳代が全体の 53% を占めた。

e) メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

Methicillin-resistant *Staphylococcus aureus* infection

報告総数は 201 人, 定点当たりの報告数は 28.7 で, 前年の約 1.1 倍, 例年及び全国と同程度であった。年齢別では 70 歳以上が全体の 67% を占めた。

f) ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

Penicillin-resistant *Streptococcus pneumoniae* infection

報告総数は 3 人, 定点当たりの報告数は 0.43 で, 前年の 1.5 倍, 例年の約 0.6 倍, 全国の約 0.2 倍であった。年齢は 70 歳以上であった。

g) 薬剤耐性緑膿菌感染症

Multidrug-resistant *Pseudomonas aeruginosa* infection

報告総数は 2 人, 定点当たりの報告数は 0.29

で、例年の 10.0 倍、全国の約 0.9 倍であった（前年報告なし）。年齢は 70 歳以上であった。

まとめと考察

全数把握対象疾患のうち、結核は 2020 年と比較し減少した。0 歳から 90 歳代まで幅広い年齢層で報告され、病型で比較すると、肺結核が全体の約 4 割を占めた。年齢では 70 歳代以上が全体の約 6 割を占めた。また、梅毒は昨年を大きく上回る報告数となっており、2 年連続過去最多を更新した。全国的にも年々増加傾向であり、県内での報告数も急激に増えているため、今後も動向に注意する必要がある。また、新型コロナウイルス感染症は、2021 年 2 月に指定感染症から新型インフルエンザ等感染症へ分類された。報告数も昨年を大きく上回る数となった。

定点対象疾患のインフルエンザ及び小児科対象疾患の定点当たりの報告数は、前年の約 1.3 倍、例年の約 0.6 倍、全国の約 2.1 倍であった。インフルエンザについて報告人数は 14 人となった。過去最低となった昨年の 4 人よりわずかに増加したが、例年を大きく下回る報告数となった。また、小児科対象疾患のうち、RS ウイルス感染症と手足口病の増加が見られた。RS ウイルス感染症は前年、例年及び全国のいずれも多くなっており、流行の年となった。なお、例年夏頃に増加が見られていたが、本年は春先に増加が見られた。

眼科定点対象疾患のうち、そのほとんどの報告数を占める流行性角結膜炎は、例年の約 0.3 倍と少なかったが、全国の約 3.4 倍と多く、例年通りの傾向であった。

基幹定点対象疾患の報告数は前年の約 0.1 倍、例年の約 0.01 倍、全国の約 0.1 倍であった。無菌

性髄膜炎以外の疾患は報告数が 0 となった。

月報告対象疾患の性感染症の報告数は前年の約 1.1 倍、例年の約 1.2 倍、全国の約 0.7 倍であった。性器ヘルペスウイルス感染症は 20 歳代から 70 歳代まで幅広く認められ、それ以外の疾患は 20 歳代に多く認められた。また薬剤耐性菌感染症は前年の約 1.1 倍、例年と同程度、全国の約 0.9 倍であった。

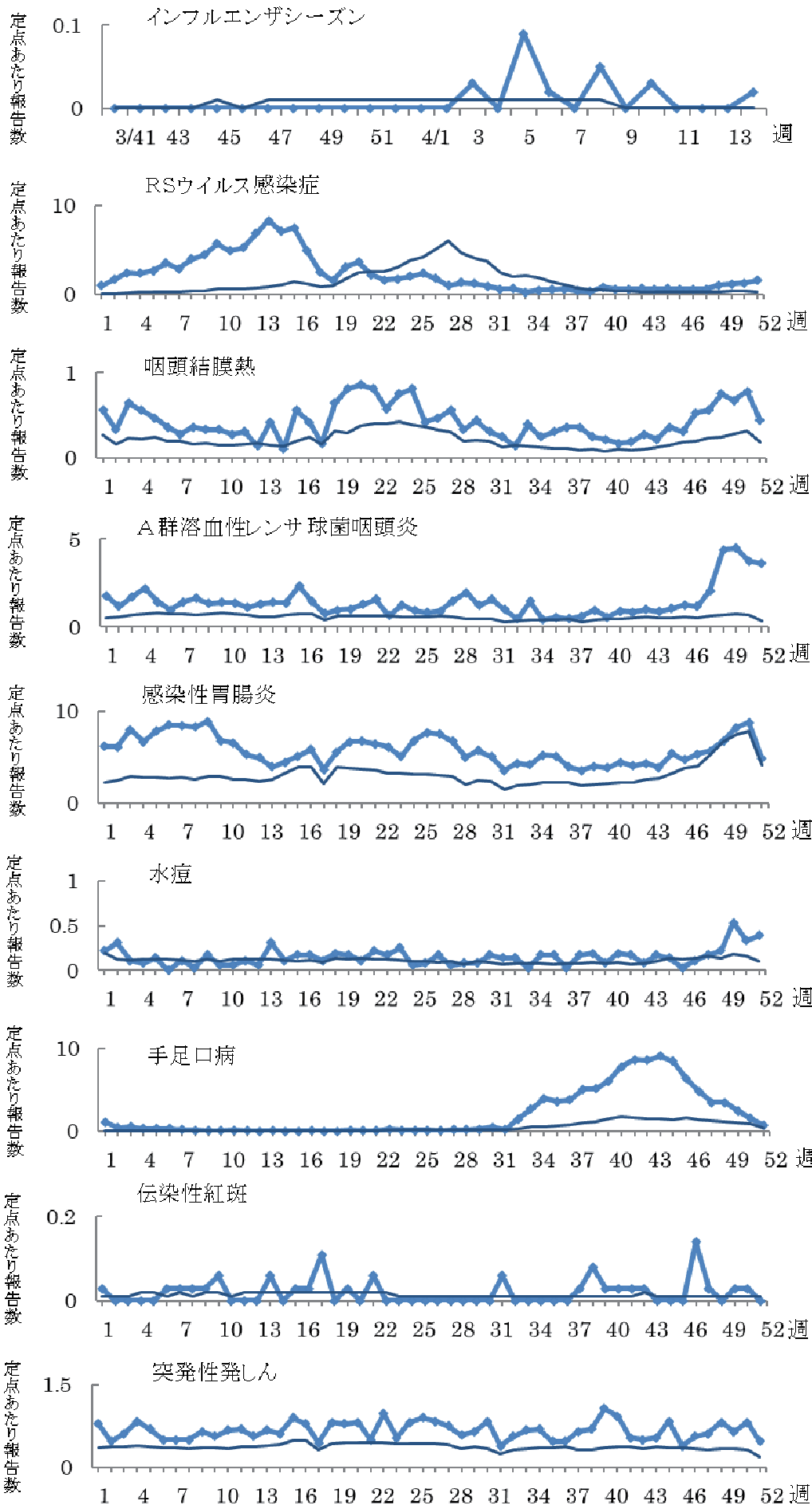
本調査結果から、疾患によって流行発生時期や地域差、年齢差等があることが分かった。また、小児科疾患はインフルエンザをはじめほとんどの疾患が例年より少ない値となった。これらは新型コロナウイルスの感染対策による影響が考えられるが、RS ウイルス感染症は例年より多く、流行時期のずれがみられ、新たな動向を見せた 1 年であった。サーベイランスの重要性を再確認する結果となった。今後も引き続き、感染症情報の収集と解析を的確・迅速に行い、感染症の発生動向に細心の注意を払うとともに、幅広い世代に適切な情報の提供と感染予防の啓発を行っていく必要があると考えられる。

備考)

感染症発生動向調査事業は、患者情報と病原体情報から構成されており、当研究所の微生物部では病原体情報を得ている。

文献

- 1) 厚生省保健医療局長通知：感染症の予防及び感染症患者に対する医療に関する法律の施行に伴う感染症発生動向調査事業の実施について、平成 11 年 3 月 19 日健医発第 458 号。



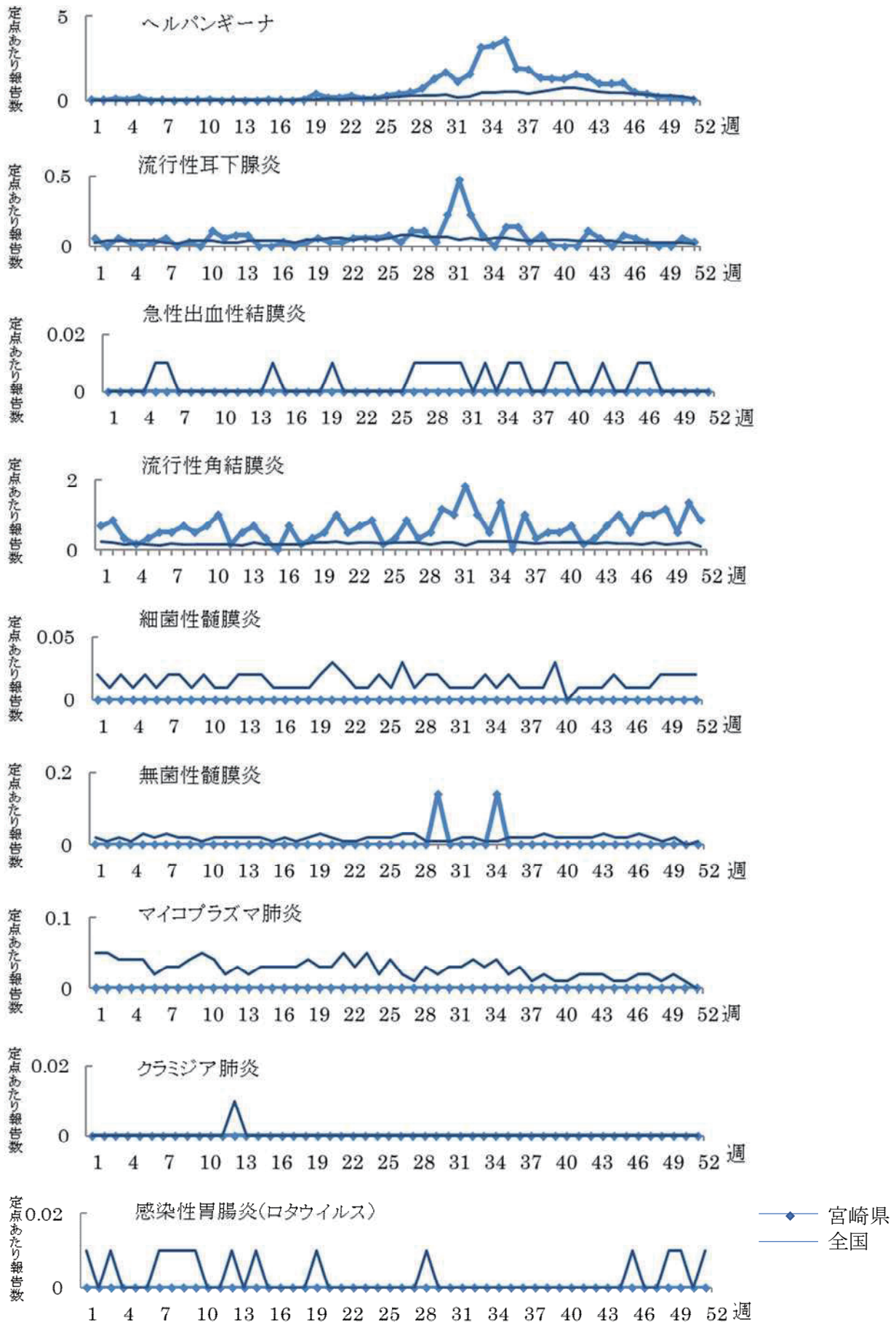


図 2 定点把握対象疾患（週報告対象）の定点あたり報告数の週推移（経時発生状況）

表 3 定点把握対象疾患の発生状況の概要 (宮崎県, 2021 年)

疾患名	報告総数	定点あたり 報告数	年齢群別報告数の割合		昨年比 (県内2020年) (%)	過去5年間の 平均との比 (%)	全国比 (2021年) (%)
			好発年齢群	報告総数に 占める割合 (%)			
インフルエンザ	14	0.24	0~4歳	29	356	0	161
RSウイルス感染症	4,218	117.2	6ヵ月~3歳	84	1460	204	163
咽頭結膜熱	798	22.2	6ヵ月~3歳	84	84	57	205
A群溶血性 レンサ球菌咽頭炎	2,654	73.7	1歳~4歳	48	59	62	247
感染性胃腸炎	10,839	301.1	1歳~3歳	46	116	71	186
水痘	279	7.8	5歳~6歳	28	55	37	137
手足口病	3,720	103.3	6ヵ月~2歳	82	505	100	422
伝染性紅斑	36	1.0	6ヵ月~4歳	78	8	4	143
突発性発しん	1,236	34.3	6ヶ月~1歳	93	88	82	180
ヘルパンギーナ	1,229	34.1	6ヵ月~2歳	80	152	77	288
流行性耳下腺炎	111	3.1	4歳~8歳	68	80	8	133
急性出血性結膜炎	0	0.0	—	—	0	0	0
流行性角結膜炎	198	33.0	20歳代~50歳代	71	133	30	335
細菌性髄膜炎	0	0.0	—	—	0	0	0
無菌性髄膜炎	2	0.29	—	—	200	30	30
マイコプラズマ肺炎	0	0.0	—	—	0	0	0
クラミジア肺炎	0	0.0	—	—	0	0	0
感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)	0	0.0	—	—	0	0	0
性器クラミジア感染症	254	19.5	20歳代	57	98	102	64
性器 ヘルペスウイルス感染症	124	9.5	20~40歳代	55	117	196	104
尖圭コンジローマ	25	1.9	20歳代	68	114	114	34
淋菌感染症	94	7.2	20歳代	53	127	143	68
メチシリン耐性 黄色ブドウ球菌感染症	201	28.7	70歳以上	67	106	98	95
ペニシリン耐性 肺炎球菌感染症	3	0.43	70歳以上	100	150	58	24
薬剤耐性緑膿菌感染症	2	0.29	70歳以上	100	—	1000	87